

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編 〈最終回〉

田宮 治

発想の大転換が原点

本誌で猪猟の極意や猪犬の止め芸を、実戦を通して伝授し、その様子をありのまま発信し続けてきたことで、猪猟に懸ける私の存念が伝わり、猪猟人からの反響もよい。

若者たちの急成長と夢目標の大山を一つ越えたことでほっと一息つき、ひと区切りの大成功に胸をなで下ろしている。今後も努力と精進を積み重ね、次なる大山の頂点を目指して突進する覚悟である。

図るしか道はない。

昨猟期には待望の長野支部が設立できた。この新たな支部を起点に、減りつつある猪猟人対策や、狩猟界を取り巻く厳しい規制を何としても若者たちと一緒に乗り越え、皆が心底楽しめる永久不変で魅力ある猪猟道を構築したいと意気込んでいる。

自然環境や農林業を守るために、今後ますます大物猟の重要性は増し、大物猟人の力が求められる時が必ず来るだろう。こうした期待に応えることで、狩猟が社会に受け入れられて、そして喜んでもらえる猪猟人になることも、私たちの大事な役目である。だから、決して諦めてはならない。この大事な時期だからこそ、それぞれ猟人が挙って創意工夫を凝らし、行く末の狩猟道を見据えて頑張り通さなければならぬ。

私とその先陣を切って、猪猟の

基本である「猪犬と登る猪猟の頂点」をどこまでも貫き通し、何度でも実践していきたい。たとえ狩猟人口が減って一人になろうと、規制で雁字搦めになろうと、一流芸の自作猪犬たちと楽しみながら大猪と堂々と勝負できる猪猟道を極致まで高め、広めていきたいと思っている。

私の猪猟道は一人で幾つになってもどの猟場でも無理なく実践でき、どんな猪と戦っても必ず勝って喜べ、心から納得できる単独猪猟法を猪猟人生のすべてを懸けて完成させたものである。また、地元猪猟人との折衝や諸々の外圧に耐えながらも、猪猟道の重要性を強く実感して追究し続けて、やつとのことで編み出したのが独自の猪猟道である。

地元グループに入会して始めるのが一番良い方法だと思うが、当時、私のような都市部に住む者は余所者扱いされ、なかなか入会することができなかった。その悔しさを前向きに捉え、「今に見ている。必ず一人で猪の獲れる単独猟師になってみせる」と、強い気持ちで覚悟を決めた。

しかし、当時の猟法では一人で猪を獲ることなど到底無理だった。どこの猟場に出猟しても「一人で獲れるものか」と馬鹿にされていた。毎日、追っても追っても逃がしてばかりで、悔しさと泣き出した日が続いた。

そんな気持ち折れそうになるまで押し込まれていた時期に、追いつく犬ではどうやっても猪は獲れないが、逆に犬が猪を止めれば一人でも簡単に獲れるのではないかと、ということに気付いた。それから止め犬の猪猟犬に取り換えたのである。この発想の大転換が、今ある猪猟道の原点になっている。簡単に使役犬を取り換えるといっても、何十年もかけて作り上げてきたプロットやビーグル、さ



仔犬はこのくらいになると未来が見えてくるもの。個性に合ったしつけをがっちりやり、あくまで自分の猟法に合った猪犬に仕上げることである

らに追い鳴きの素晴らしいブルーチックなど、追い犬で使えばまだまだ一流犬群だった。その犬群だけでも三十頭は在舎していた。

その犬群はそのまま残しておいて、猪止め芸の良い猪犬を全国から求め続け、そこから創意工夫して育て仕上げて、実戦で検証してきたのである。その数は数百頭にも上った。

今にして思えば、いかに猪を獲りたいからといっても無茶な話である。何もかもが無謀と紙一重で、試行錯誤の連続であった。

「負けてたまるか！」と決して諦めず、根性で押し通して頑張り続けてきたことが、私の夢目標である一人でも簡単に猪が獲れる今の田宮系猪犬の完成となったのである。

ここで分かってもらいたいこととは、厳しさや辛さの限界に挑戦しなければ、決して夢も目標も達成しないということである。特に苦勞が多いほど、その至難の限界に耐えて頑張り通した先に咲く花こそが、より美しい極致のものになる。

繰り返して発信し続けてきた「一流芸の猪犬が欲しい」「どうしても猪犬の達人になりたい」というのであれば、まず自らの力で立ち上がり、どんな厳しい苦勞も乗り越えて、花を咲かせることである。

これから先、私にとつての猪犬道は努力や挑戦では乗り越えられない天命という宿命に突き当たると。その残された時間での勝負となる。そのため、人としての生きざまこそが、猪犬を未来に繋ぐための限界に挑戦するサバイバル戦になるのである。

この苛酷なサバイバルの道程でも、大事なことは猪犬の要となる猪犬芸と猟技術を常に常に上を目指して決して信念を曲げず、どこまでもわが猪犬道を忍耐強く押し進めることである。八方塞がりの状況下では起死回生の秘策もないが、何とかやり抜き、今まで覚えた猪犬体験を生かして、外圧に負けずに邁進してもらいたい。

私もまだまだここからが正念場であり、「負けてたまるか！」の信念を持って体調管理に注意しな

がら、愛犬と一緒に慣れ親しんでいく頂点までの道程を登り続けたいと思っている。

この先の壮大な夢目標

生ある限り真の猪犬道やその近道まで探求し続け、さらに吟味しながら精度を高め、いつまでも使える俺流猪犬道の極致である高嶺たかねの月を追い続けたいのである。そして、道程での徒然に「この作戦は良い」「この崖はこのように登ったほうが良い」などの時々的事柄を、実戦を通して頂点までの道案内することで、一人でも多くの猪犬人に楽しい猪犬の維持や猪犬界の活性化を図ってもらい、何とか伝統の猪犬文化を守り通していただきたい。

まだ道半ばでゴールが見えない中、猪犬がうまくいかない理由、つまり猪犬界の悪い要因は改めて発信させていただきたい。

この残り少なくなった時機だけに、私にできる最良の役目は、一流猪犬の単独獵人ができる可能な極致の猪犬道を押し出していき

いのである。今後は一人から三人（猪猟の限界人数）くらいまでの猟好き仲間を招き入れ、人と人とを楽しさと友愛で結び付ける猪猟を實踐していきたい。そして、面白く楽しい猪猟を見せることで、この伝統を守って確実に未来に繋げていきたいのである。

これから先の夢目標は、自分で作った一流猪犬群と、自分のためだけに一生懸命頑張って完成させた猪猟道をもう一歩前進させて人様のお役に立てるものに仕上げていきたいと思っている。そのことに最善を尽す覚悟である。

特にこれから先に課題となっていくことは、狩猟人口の減少による猪猟の生き残り戦略であろう。このサバイバル戦略の本質部分こそが、私が押し進めている止め猪犬群による「一人でも十分に楽しめる単独猟」だと思っている。幸いこの連載もにわかにはクローズアップされてきたようで、わが猪犬や猟道に自信を深めてきて意気込んでいるところでもある。

「年齢だ」「至難だ」などと言つて、諦めたり逃げ出したりするわ

けにはいかなない。大好きな愛犬や、守り続けたい猪猟を広めることで、一人でも多くの若者たちが猪猟に参入してもらうために大暴れしてみたい。

この猟法が最も安全で安心で楽しめる楽しい猪猟であることを、一戦一戦の実戦を通して、ゴールに向かって残る人生のすべてを押し出していきたい。そして、その気になれば誰もが面白く簡単にできる猪猟の王道の構築に挑み続けていきたい。現在、この壮大な夢目標の実現に向けて若犬たちの鍛錬に日々明け暮れている。

今年には長野支部を起点に、千葉と山梨の友人（親方）たちと、三人の気楽な猪猟となるだろうが、皆ベテランで気心の知れた同年配で同じ猟感の方々ばかりである。

私が元氣なうちに、わが古里である新潟県村上市の猟人を猪猟に招きたいと思っている。この地は秋田と並び、またぎ（熊猟）で知られており、鹿も猪もない所である。猟期の大半は厳しい雪の中なので、私の猟場に来てもらい、真

冬でも地肌の温もりを感じながら熊に代わる大物猟（猪猟）を堪能してもらいたいと思っている。満兄に代わって私が案内しようと思しみにしている。

山で私と出会って、猪猟を一緒にやってみたい方は気軽に声をかけてほしい。いつでも私の大たちや私の猟法をもってお相手する。この猟に参加する場合、関東猪犬猟山彦会の入会費や案内料などは

いらぬ。ただ一緒に猪猟を楽しんでその醍醐味を味わってもらい、大事な猪猟を守って未来に繋いでほしいのである。

好きでやり通してきた単独猪猟もここまでやってきたのだから、どこの猟場であれ望まれば「これが私の愛犬たちの一芸であり、この戦いが俺流猪猟である」と、自信を持って最高の戦術を目の前で見せたい。そして、この猪

を満喫していただくことで、人様のお役に立ちたいと思つてい

いつでも当たり前のように、この極致の猪猟を實踐するために、今ある実力の限界に挑戦し、

自分の持てる力を押し上げて、一日でも長く続けられるように努力して頑張ることが最大の目標である。何度でも繰り返すことが私の信条であって、飽きも感りもせず同じ頂点までの道程を登り続ける所存である。どこまでもこの道の正しさを信じ、草木を愛で愛犬の成長を楽しみながら、また一つの大山に登る決心である。

* * *

「猪犬と登る猪猟の頂点へ」も読者の皆様のお陰で無事に集大成できたことは本当にありがたい心より感謝しております。この気持ち

を大切に改めて次なる大山の頂点に向かって万全の道案内を思案しているところです。

次号からは、この存念を基に新しい目線で時代に即した猪猟道を目指し追いつめるサバイバル戦略を起点に発信してまいります。基本的に愛犬の一芸を楽しみながら単独猟（二、三人猟）で実践を通して発信していくことで、後に続く猪

猟人（若者）を強くサポートしていきたくと考えています。どうぞ楽しんでいただきたいと思います。